

## 「古代・平安時代の六ヶ所村に馬はいたか？」

東海大学文学部 歴史学科考古学専攻 教授 松本 建速

### 1. はじめに

こんにちは。東海大学の松本と申します。

先ほど、山口先生のたいへん雄大な、しかも博識のあるお話を聞かさせていただきました、私も大いに勉強になりました。先生がお使いになられた「尾駮の駒」の歌、

「陸奥の尾駮の駒も野飼ふには 荒れこそ増され懐くものかは」

これは、文字は読めても意味が良く分からなかったのですが、先ほどの先生の解説で納得いたしました。そして最後に、聖獣である「尾駮の駒」ですら、「野飼う…」、つまり野で飼っていたら、荒れてしまいますよ…。そういう、「尾駮の駒も」の「も」が大切だと。「尾駮の駒」ですら…という意味なのですね。「聖獣ですら」というところが分からなければ、この意味がほとんどわからない、別な意味として曲解する可能性があったんですが、それが、よく理解できました。

そして私事ですけども、私の名前は「松本建速(まつもと たけはや)」と言うんですが、この「建速(たけはや)」の名前は、『古事記』に出てくる、「スサノオノミコト(素戔嗚尊)”から取ったんだぞ！」と、小さい頃から父に言われて育ちました。子供向けの「日本神話」を読んでいた時にですね…。スサノオは幼いころは泣き虫で悪い事ばかりしていて、お姉さんのいる天界に行き、いろいろ悪さをするわけですね。その姉のアマテラスオオミカミ(天照大神)にいろんな反抗をして、その中で屋根の上から馬の皮を剥(は)いで突き落す。そういう部分があったりして、私の名前はひどい神様の名前を取ったんだなあ、なんて、実は思っていたんですが、本日の山口先生の話で、これは西のペルシアなど西国の方では、聖獣を太陽神に対して捧(ささ)げる風習があって、その話が東の陸の果てに伝わって来て、陸の果ての日本列島に来た時に、少し変わった。とは言え、進歩…。進歩と言いますか、内容としては、太陽に対して、あるいは太陽であるアマテラスに対して、馬を…、聖獣すなわち斑の馬を捧げた。それを少し変形させて書いてある。それを私たちが曲解して読んでいたという事なんだなというのが、よく分かりました。それが、山口先生のさきほどのお話に関連して、ちょっとお話したかったことです。

### 一本講演の3つの問い

これから、本題に入りたいと思います。「尾駮の駒」という歌がありますが、これに「陸奥(みちのく)」がつきますね。“陸奥の尾駮の駒”。こういう言葉があるものですから、何となく我々は、そこから“陸奥の尾駮の駒”。それから“尾駮の牧”。こういうふう読み換えてしまって、あたかも“尾駮の牧”というのがあるような気になって話しています。しかし、古代の文献に出て来るのは、“尾駮の駒”であります。

ただし、「陸奥(みちのく)」がついてますから、“陸奥”に“尾駮の駒がいた”というのは、言っても良いだろうと思うわけです。それは10世紀頃です。

私も少し「尾駁の駒」が出て来る歌を探してみました。13世紀の前葉ぐらいまではありましたが、その後は登場していないようです。そして「尾駁の駒」が歌に詠まれている、10世紀の頃は、六ヶ所村の辺りを含めて、青森県全域、ほぼ東北北部全域に、考古学では“防御性集落(ぼうぎょせいしゅうらく)”って呼んでいます、集落を堀で囲うような、あたかも、“戦があった時に、堀で守りますよ”と、そういう構造の集落がつくられる時期なんです。ほぼその頃に、「尾駁の駒」が詠まれているということが分かります。

それでは「尾駁の駒」は、一体、どこで育てられていたのでしょうか？「陸奥の尾駁の駒も野飼ふには」って言うのですから、“陸奥”のどこかなんだろうなどは思いますが、それが「どこか？」というのを、まず一つ目の疑問にして話を始めます。そして本日の目的は3つなのですが、それはみな「問い」ばかりです。

第1の問い。「尾駁」という地名を持つ六ヶ所村。現在、「尾駁」という地名は六ヶ所村にあります、  
「平安時代、そこで馬は飼われていたんだろうか？」これを、あらためて考えてみたいと思います。それからもう一つ。「六ヶ所村では、いつから馬が飼われていたんだろうか？」これが第2の問い。それから、「六ヶ所村で、馬を飼っていた人々はどこから来たんだろうか？」これが第3の問いです。

この三つ目の「人々はどこから来たか？」ですが、なぜ、そんなことを問うのかなあ？って、お思いの方もいらっしゃるかも知れません…。実は、人間は、同じところにずっと何代も何代も住んでいるっていう人の方がめずらしいのです。皆様のご先祖をたどって見るとお分かりだと思いますが、かなりたどれる方でも室町時代ぐらいまでかも知れません。六ヶ所村に室町時代までたどれる方がいらっしゃるかは分かりませんが、それより前の時代になると、そう簡単にはたどれません。日本全体ではそれなりの数、そういう方々がいらっしゃるでしょうけれど、普通はやはり、現在の我々のほとんどは、何世代か前、どこからか移動して来ているわけです。

平安時代に馬を飼っていた人たちも、発掘をしてみますと分かりますが、実はそうなんです。ずっと前から六ヶ所村域に住んでいたわけではありません。それでも「六ヶ所村で馬が飼われていたか？」というのを、なぜ、わざわざ問うか？「尾駁の駒」歴史研究会の方に頼まれたからというのも一つの理由ですが、それだけではありません。

先ほどの歌に「陸奥の尾駁の駒も…」とありましたが、「陸奥」、すなわち東北地方は古代の馬産地であることは確かです。それは、文献からも考古学資料からも、確かめることができます。しかし、「陸奥の尾駁の駒」と言ってしまうと、育てられた場所が不明になってきます。「陸奥」は広いですから、それだけならばそのどこかということになりますが。それに「尾駁の駒」と言いますと、六ヶ所村を知っていますと「尾駁」っていう地名かと思いますが、先ほどの山口先生のお話にあった通り、“駁の馬”のことですから、どこで育ったかは本当は分からないんです。でも、現存する地名や近世の記録に残る地名を見ますと、六ヶ所村にしかありません。近世ですと、1647年の地図に、今の尾駁のあるあたりに「尾駁沼」と書かれたものがあります。

というわけで、なぜ1600年代に、「尾駁」という地名が書き残されたかは分からないのですが、現存する地名で考えますと、日本列島中探しても、他にこの同じ文字を使った地名は無いものだから、六ヶ所村が最優力になります。それで取りあえず、考えて見ようじゃないかということになったわけです。「取りあえず」というのは、ちょっと聞き捨てならないかもしれませんが、一応、

学問上は、そうなってしまいます。

## 2. 古代の六ヶ所村には、どんな人々が暮らしていたか？

### (1) 古代の六ヶ所村域での人々の生活の継続状況

古代の六ヶ所村にどんな人々が暮らしていたのか？について、次に考えてみます。

「古代の六ヶ所村域での人々の生活の継続状況」。“継続”と言いましたが、先ほど言いましたように、人間は、ずっと同じにところで暮らしていることは滅多にないものですから、それを考えてみることにしました。

さて、10世紀の中頃に「陸奥の尾駈の駒」の歌がありますが、そのころ突然、六ヶ所村には集落ができてきます。正確に言いますとその少し前、9世紀後葉に出現するのですが。問題は、なぜ出現するかです。それより前には数百年間、遺跡がありません。人の住んでいた痕跡(こんせき)が見えません。六ヶ所村域では、弥生時代の終わり頃、実年代にして1700年、1800年前くらいの遺跡がありますが、その後、数百年間は遺跡が見つからない、人々の痕跡が分かりません。しかし、9世紀後葉になって、突然、集落がつくられ始めます。強調しておきます。六ヶ所村域にはその前、“数百年間、誰も住んでいませんでした！”。

皆さんよくご存知の「六ヶ所村郷土館」にまいりますと、縄文土器がたくさん並べられています。縄文時代の人たちが、六ヶ所村には数多く住んでいたのだから、“ずうーっと人は住んでたんだろーな”っていう印象を、我々は持ってしまいがちですが、実は、縄文時代から現在まで直結はしていません。つながってはいないのです。「三内丸山遺跡」で有名な青森市も、縄文時代、あれは5500年から4500年くらい前の遺跡で、その頃、たくさん人がいたのですが、その後、やはり途切れるんです。ずうーっと続いているわけじゃないんです。今日はその話をするわけではありませんが、普通に考えてみますと、縄文時代の人たちは、今、北海道にいるアイヌの人たちにつながっていくのです。そして私たちのほとんどは、その後、西の方からやって来た人々の末裔(まつえい)ということになります。それは六ヶ所村も同じです。9世紀後葉に“「平安文化地域」から人々が入植”してきたのです。この「平安文化地域」っていうのは、“京都から来た”っていう意味ではありません。東北地方のどこか？ぐらいだろうと思いますが、その人々が馬を飼っていた。そして“馬を飼っている”ということからその系統について考えると、人々はもともと東北にいた人ではないのです。もっと南から来た人が、ある時期、東北のあるところに定着して、そこからまた移動した、という感じかな？と思っていますが、次に、考古資料を使ってその話をしたいと思います。

### (2) 東北北部の集落の盛衰

東北北部というのは、盛岡市・秋田市よりも北側。もう少し正確に言うと、米代川流域あるいは馬淵川流域よりも北、という印象です。盛岡市、秋田市は入りません。今、北東北と言え、入れているかと思いますが、考古学的事象で考えるならば、現在の盛岡市や秋田市は、当時は完全に和人の地です。それより北を見て“人々の移住”を考えますと、5世紀、7世紀、9世紀が画期になります。そしてどの時期も、考古学的事象からは、南の地域から人々が来たとしか考えられません。人々は北海道から南下しているわけではありません。

集落の分布を見ます。この地図は、5世紀後葉から6世紀中葉のもので、線が一本入ってます

が、秋田市・盛岡市よりも南のラインには、本当はもっとたくさん遺跡があります。でも、たくさんあり過ぎますので書きません。それに対して、北の方には「田向冷水遺跡」ぐらいしかないんです。八戸市にあります。そして、5世紀の終わり頃から6世紀の中頃、およそ70年間ぐらいですかね…。この大体、二世代ぐらい…。この辺り「田向冷水遺跡」っていう遺跡はありますけども、他には遺跡はなくて、ほとんど、人は住んでいません。しかも、この「田向冷水遺跡」は、元々、そこにいた人の遺跡ではないんです。これは移住者が南から来てつくりました。で、その後、そこでは、ずうっーと続いているわけでもなくて。一回途切れます。そして6世紀の後葉から7世紀、だいたい7世紀以降になりますが、“第二の移住”がありまして、たくさん集落遺跡が見つかります。でも、ご覧のように東北北部の東側だけなんです。西側には集落は展開しないんです。東側のみ人口が急増します。ですから、元々いた人が急増したというわけではなくて、どうやら、南からどんどん入って来たと考えられます。これを“第二の移住”と私は呼んでいますが、これには前半と後半があります。前半期が7世紀、後半期が8世紀ということになります。

8世紀もやはり同じです。この緑で囲った東側は集落遺跡は数多くあるんですが、津軽側や秋田県側の米代川流域では、少しは見つかりますが、そんなには多くはありません。この時期の移住は、大体、東北北部の東側で起こっているというところに注目しておいてください。

それからもう一つ言いますと、「86」と書いてある数字の上が小川原湖です。それより北側に六ヶ所村はありますが、そこにはこの時期の遺跡はありません。それが、9世紀から10世紀になりますと、突然、遺跡が増えるのです。

しかも、今、言った津軽側の方が、今度は東側よりも人口が増えるんです。東北地方の西側に爆発的に集落が増加します。西側で開拓が行われる。これを、私は“第三の移住”と呼んでいます。これも、前半と後半があるんですが、六ヶ所村にはこの頃人々が住み始めるのです。それまでは、誰も住んでいませんでした。

上北北部はどうでしょう。そこは9世紀後半以降に開拓されます。会場の入り口のところに「石帯」が展示されていますが、それが出土した「表館遺跡」は、この時期、9世紀後半くらいの時期の集落です。

この“第三の移住”は少し長く続きます。百年以上続くんんですが、人口は西側に多く見られました。西側で常時開拓が進みますが、六ヶ所村も開拓されました。中でも有名な、もしかしたら馬を飼っていた建物があったんじゃないかと考えている「発茶沢遺跡」、それが10世紀の中頃以降に、ちょうどこのあたりにありました。集落遺跡です。

それから次に、「東北北部の集落の盛衰」についてまとめておきます。まず、7世紀以降に集落は急増します。東北北部の東側でした。人々の生活様式は当時の古代日本国域のものです。この時期は“東北地方に蝦夷が居た”と言われていました。“蝦夷”はアイヌ人的な印象を『日本書紀』や『続日本紀』では与えられますが、そんなことはないのです。考古学的に見ますと、そこに暮らした人々は古代日本国域の価値観を持っていました。誰も住んでいないところに、突然、南の地域から新しい文化要素を持つ人が出現したのですから、これは“移住”と考えるべきですね。元々、“蝦夷”が居たわけじゃないのです。

9世紀以降になると、今度は東北北部の西側に集落が急増します。こちらの集落は、一集落で百棟を越す数の住居が見つかったりします。東側の地域ではそんなことはありません。7世紀代、大

きな集落でも 20 棟くらいしか住居はありませんでした。しかし、西側地域では、百棟を超えるような集落がいくつも造られました。津軽地方で、稲作適地を開拓して、多数の人口を支えることができるということなのでしょう。また、会場入り口の、一番こちら側のガラスケースの中に須恵器がありますね。そこにあるのは「表館遺跡」のものですが、その須恵器も 9 世紀後葉になって作られるようになりました。そこに展示されているのは五所川原で作られたものです。六ヶ所で作られたものではありません。須恵器の窯は、広い地域の一地点でしか実は作れないです。この時期ですと、青森県内で五所川原だけです、須恵器の生産が行われているのは。そしてそこで作られた須恵器を持った人が六ヶ所に来ているのです。須恵器の生産は東北北部の西側で、“五所川原地域で始まりました”。鉄の生産も開始されますが、それも津軽側でした。

このように 9 世紀後葉以降になりますと、六ヶ所村でも集落が急増します。六ヶ所村の場合、稲作適地とは残念ながら言えないのですが、津軽地方は、稲作適地に大規模な集落が開かれたことになります。六ヶ所村には百棟を超す住居があるような集落は見つかっていませんが、それでも比較的大きな集落がつくられました。ただし、そこは稲作適地ではありません。

“第三の移住”には前半と後半がありました。前半は津軽地方など稲作適地のようなどころだけが開拓されます。後半につきましては、山奥であるとか、秋田県の山間地であるとか、あるいは、六ヶ所のような、稲作適地ではないが、いろいろな環境のところを目指して、どうも開拓者が入っているわけです。適材適所と言いますか、それぞれの環境を、何かに特化した生産をするために、そこを目指していたということかも知れません…。そんな地域を求めて開拓が行われたのが、“第三の移住”の後半です。

それを、屋久杉を使って推定され、復元された「気温変化」を見ながら説明します。

5 世紀に“第一の移住”があると言いましたが、これは寒い時期でした。図の真中に横棒がありますが、そこが平均値です。その折れ線グラフで、その平均値の横棒より下の領域の線は寒い、上の方に行くとき暖かいということです。5 世紀は下の領域に線が折れてきてますから、寒い時期なんです。この時期の移住は、「田向冷水遺跡」しか知られていません。継続しなかったということになりますね。

この、オレンジで囲ったところは、暖かい時期ということになります。この時代に移住が始まります。ただし、最初は暖かかったのですが、後に寒くなりました。それでも、最後は、またちょっと暖かくなりました。暖かい、寒い、暖かいを繰り返しました。やや寒冷期に“第二の移住”、すなわち 7 世紀、8 世紀の移住がありました。これは比較的長い期間に継続してあった移住なのですが、ただし、東北北部の東側だけでした。

そして 9 世紀に入って、“第三の移住”がありました。これは比較的長期にわたっておこなわれた移住でした。中でも暖かい時期に、六ヶ所村にも移住者がやって来ました。温暖といってもだいたい現在の気温くらいです。それに対して寒冷というのはですね、江戸時代に天明の飢饉など何回も寒冷期がありましたが、その時期の気温が飛鳥時代の頃の気温です。ですから“第二の移住”があった頃、暖かくなったから北の方に移住して来たのではないのです。ここは重要です。寒い、暑いといった気温の変化に応じて移動していたわけではありませんでした。

### (3) 東北北部地域における馬飼の開始

次の「東北北部地域における馬飼の開始」に話を進めます。7世紀以降に東北北部の東側で集落が急増しました。その地域はどういう環境のところかと言いますと、雑穀栽培の適地でした。稲作適地ではありません。そしてそこには馬が居たことを示す遺物が出てきています。

例えば、おいらせ町の、旧下田町地域ですが、そこから「阿光坊古墳群」が見つかっています。最近、非常にきれいに整備されてきましたね。誰でも見られるようになっていました。そこから、馬具が副葬されたお墓が見つかっています。7世紀の中葉の頃です。それから、八戸市「丹後平古墳群」。ここでも馬具が副葬されていたり、馬のお墓もあります。7世紀末葉から8世紀初頭頃のもので。この写真は数日前に行って、撮影してきたのですが、手前にある末期古墳で、直径4メートルぐらい。そんなに大きいものではありませんね。高さは1メートルぐらいですかね。それぐらいの土盛りがされています。杉の木の向こうにはこのような古墳がたくさん残っています。まあ、こんなに高くは見えませんが。

それから、ここに映したのは馬具の数々です。末期古墳は、飛鳥時代から奈良時代に相当する頃のものですが、東北地方の東側、岩手県から青森県のおいらせ町ぐらいまでのあたりに、数多く見つかっています。その中から、馬具、例えば轡(くつわ)だとか、そういうものがよく見つかります。「1」「2」「3」「4」です。それから、「1」「2」が「丹後平古墳群」。「3」「4」が「阿光坊古墳群」のもので。それから「5」番「6」番、杏葉(ぎょうよう)。これはすでに消滅してしまった「鹿島沢古墳群」のもので、非常にきれいな金銅製の飾りです。馬につける飾りですが、馬を飼っていたということが分かります。それから「第5図」。四角の中にある「1」「2」「3」「4」。「4」番目は、岩手県の山田町ですけれども、馬が見つかったところ、あるいは馬具が見つかったところ。

これが「丹後平古墳群」の、馬の墓の図です。馬の歯が見つかっています。下に示したのは長野県飯田市の新井原12号古墳のもので、丹後平のものとはほぼ同じ大きさの穴が見つかってます。馬一体分が埋葬されていました。丹後平のものは7世紀末葉から8世紀の初頭にかけての馬の墓です。馬の墓は、中国東北部から朝鮮半島、それから日本列島の古墳文化にかけて、広く分布しています。ですから、普通に考えると、この丹後平古墳群でも古墳文化の影響で、あるいは古墳文化の人々が北上して来てつくられたと考えるのが当然でしょう。これは、八戸市の「丹後平古墳群」の写真、教育委員会発行の報告書に載っている写真です。実際はもっと上に土盛りされていた、さっきの「阿光坊古墳群」のような景観だったと考えられます。

以上が7世紀のお話でした。7世紀以降には、馬を飼う人が確実に来ていましたね。そして東北北部の東側でした。それが、9世紀以降になりますと、今度は西側、津軽の方ですね、そこで集落が急増しました。しかしなぜでしょう？9世紀後葉から10世紀の初頭までに廃棄される住居が多いのです。その時期、一集落の中でも、たくさん家を壊しています。

そしてその上を915年に噴火した、十和田火山の火山灰が覆ったりします。ですから火山灰が降るよりも前に、それらの住居は捨てられていたことになります。それはなぜなのでしょう？このころ、六ヶ所村やその周辺地域に集落が増え始めるわけですから、もしかしたら、津軽や秋田県に、まず集落を開拓し、そこにある程度の数の人を残して、何人かが外へ出て行く、そんなことがあったのかもしれない。

#### (4) 六ヶ所村の古代の集落には誰が住んでいたか？

それでは六ヶ所村の古代の集落には誰が、どんな人々が住んでいたのでしょうか。奈良時代以降の六ヶ所村に最初に集落が営まれたのは9世紀後葉です。「表館遺跡(1)」がそうです。出土遺物の一部がこの会場に展示されています。土師器の坏、須恵器や石帯です。そのお椀みたいな形の土器が「杯(つき)」ですが、その作り方をもとに年代が考えられるのです。

ほかに「家ノ前遺跡」というところからロクロ製の土師器が出ています。ロクロの土師器が作られたり使われている時期は、9世紀後葉ぐらいから10世紀初頭ぐらいまでですから、「家ノ前遺跡」も六ヶ所村では古い方に入る遺跡かな…？と、ちょっと考えています。いずれにしても、六ヶ所村の平安時代の集落は9世紀後葉ぐらいからつくられるようになりました。

その次の時期の遺跡といたしましては、例えば「唐貝地遺跡」。今、ちょうど東海大学が、倉内地区の唐貝地区で「金堀沢遺跡」を調査していますが、そのすぐ北西に道が通っていますが、その道を作るときに発掘された遺跡です。9世紀後葉～10世紀初頭ぐらいの土器が出ています。ほかに「弥栄平(4)(5)遺跡」、ここも大体同じぐらいの時期ですね。

「表館遺跡(1)」遺跡から出て来ているものに「石帯」があります。そこに展示されています。これは、その当時の貴族が持っていたようなものです。ベルトの、一番端っこに付ける飾りです。白い石を使っていますから、それなりに位が高いのではないかと貴重なものだぞ！などと考えられているものです。ただ、一つしかありませんからね。正式なベルトの場合、そのような石の飾りが何個も付いています。ですからベルトを持ってたわけではなくて、別の意味合いを持って、例えば、貴族からそれ一つだけをもらったものかも知れません。それでもそういうものをもらった人が、六ヶ所村にその当時、居たんだということになりますね。

また、先ほどの地図の繰り返しになりますけれども、いずれにしても、六ヶ所村。その青く囲ったところには、9世紀後葉になるまで誰も住んでいませんでした。その当時、人々は東北中に住んでいますし、もちろん日本列島中に人が住んでいますから、どこからでも来られます。でも、北から来たわけではありません。南の方から来ています。それではどこから来たのか？

次の図は「表館遺跡」はここですよ！という図です。「発茶沢遺跡」のすぐ隣りです。違う名前を付けていますけども一つの遺跡でも良いのかも知れません。「発茶沢遺跡」は10世紀中頃以降の集落遺跡です。「表館遺跡」は、それよりも二世代ぐらい古いということになります。

じゃあ誰が住んでたか？先ほど10世紀初頭までの話をしましたが、10世紀中葉になりますと「発茶沢遺跡」では、普通にロクロの土師器の杯が見つかります。五所川原産の須恵器もあります。加えて、この時期から突然「石組のカマド」が出てきます。カマドの一部が石を組んで作られているのです。そういうカマドが使われるようになるのが10世紀中葉以降です。

それから、「発茶沢遺跡」の場合は、「掘立柱建物」と「竪穴住居」を接合したような建物が出てきます。少し前まで岩手県にあった「曲り屋」みたいに、もしかすると、その掘立柱建物、小屋と言いますか、そちらで馬を飼って、竪穴住居の方に人間が生活していた、ということになるのかなあ～と思っています。それが、「発茶沢遺跡」だけから見つかっています。

「上尾駁(2)遺跡」。ここも大体同じようなものが見つかっています。「石組みのカマド」が作られていました。「沖付(1)遺跡」はですね、そこに展示されている「灰釉陶器(かいゆうとうき)の皿」が出てきましたが、ただ、気をつけなければいけないのはですね、皿を皿として使ったわけじゃな

いかも知れないということです。そこにも「転用硯(てんようけん)」と書いていますが、割れた皿を硯(すずり)として使っていました。皿を入手して使っていたが、それが割れたから硯としたということもあるかもしれません。しかしそうではなくて、割れた皿を硯としていた人から入手する可能性もあるでしょう。最終的に遺跡に廃棄される時には、硯だったことだけは確かです。それでも硯ですから、墨と、おそらく筆で字を書く人がいたということですね。文字を知らない「蝦夷(えみし)」…。どうやらそうではないですね！

それから、五所川原産の須恵器、他にもいろんな鉄製品が出てきています。図には「小鍛冶(こかじ)」って書いてありますが、あのトンテンカンの鍛冶屋さん、鉄製品を作る鍛冶です。そういうことをしていた痕跡(こんせき)が見つかっています。砂鉄から鉄を作る場所ではありません。作られた鉄の素材を叩いて刃物にしたり、他のいろんな道具を作る。そういうことが行われていたようです。

ほかに石組みのカマドが見つかっています。土器を見ますと、器の横に線が入っていますね。これはロクロを使っていた、「水引(みずびき)」していた痕跡です。ロクロを使って調整した長胴甕(ちようどうかめ)も出ています。煮炊き用です。これはロクロが無いと作れないのですが、六ヶ所村の中で作ったわけじゃないでしょう。津軽か八戸市ではロクロ土師器を作った場所が見つかっていますから、そのあたりから持って来ているのかも知れません。五所川原産の須恵器は、五所川原から持って来ていることが分かります。

住居跡から見つかった土器のセットについて言いますと、ロクロ土師器とロクロを使っていない土師器が組み合わさっている場合、ロクロをつかわない土師器だけの場合があります。ロクロ土師器がないのは 10 世紀中葉以降くらいですかね。ですから、ロクロの土師器を持っている住居の方が古いんだよ…ということです。例えば、図の下の方の「発茶沢遺跡」では、ロクロの土師器はありません。ですから 10 世紀の中葉以降になりますよ…。9 世紀後葉あたりに、最初に六ヶ所村に入ってきた頃の人、入植先から持ってくるのでしょね、ロクロ製のものを持っています。その後、定着した人、何世代かそこで暮らしているうちに、ロクロ製品は壊れてなくなっていくのです。あるいは、次の新しい世代が入って来た時には、ロクロ製品がもう作られていない時代の人が入って来るので、集落からロクロ製品がしだいになくなっていくことになるのでしょね。

これは「沖付(1)遺跡」の皿です。皿として全体像が復元された図ですが、見てお分かりのように、真ん中辺で割れていますよ、という図になってます。会場にも展示されていますが、割れていない皿として復元されています。でも「転用硯」と書いてありますね。元々、皿だったものが割れてしまって、その破片を硯として使ったということです。皿として復元してしまうと皿にしか見えなくなってしまうがね。

それから、図の下の方にあるのは金槌(かなづち)。これは、鋏(くわ)の先です。丸い形をしているのは紡錘車(ぼうすいしゃ)です。糸を紡(つむ)ぐ道具です。11 番は斧(おの)です。槍鉋(やりがんな)みたいなものもあります。板を削る道具ですね。そういう刃物があったり、鉄製品がたくさんあります。これらは「上尾駱(2)遺跡」から出ています。

それから、第 10 図は、これは、歴史研究会会長の相内さんの得意分野かもしれませんが、宗教的なものだと考えられています。上の方は「弥栄平遺跡」から出ている錫杖状鉄製品(しゃくじょうじょうてつせいひん)と呼ばれています。下の方は、茨城県や秋田県鹿角市等から見つかった類例を、『六ヶ所村史』からコピーして貼り付けておきました。おそらく南の方から、同じような宗



教的な活動をしている人が来ていたのでしょね。

先ほど、小鍛冶、トンテンカンという鍛冶をやっていると言いましたが、その痕跡が第 13 図です。上の図が羽口(はぐち)です。土製です。炉のなかに炭を入れ、そこに酸素を吹き付けて 1,200 度の高温にして鉄を柔らかくして、トンテンカンと鍛冶をするのですが、そのときの酸素を吹き付けるための道具が鞆(ふいご)です。その鞆(ふいご)に付ける送風口のような役割を果たすのが羽口(はぐち)です。それから、下の、ちょっと不整形をしているものですが、そうやって鍛冶を行うと鉄が溶けますね。そして溶けた鉄やその鉄素材のなかにいくらか入っている不純物とか、そういうものが混じってできるのが、この不整形の鉄滓(てっさい)です。ゴミですね。こんな形の鉄滓(てっさい)が出ますと、小鍛冶、トンテンカンの鍛冶があったんだということが分かるのです。

### 3. 上北北部における新たな文化要素の出現とその由来

#### (1) 石組カマド

次の話題は「上北地方における新たな文化要素の出現とその由来」です。さきほど、石組カマドが 10 世紀中葉以降に出て来ると言いましたが、その由来を考えてみます。ちょっとわかりづらいのですが、図のこの上の方にある、ウサギの耳みたいになっていますね。これがカマドの煙を出す所です。そこの枠を囲ったり覆ったりしているのが石なのですが、そういう石を使ったカマドがあります。右側のカマドも、焚口(たきぐち)のところに石を積み上げて構築しているように見えますね。

いくつか石組カマドの例を見ておきます。例えば、これは鹿角市のものです。図中の 3 番です。それから 4 番、これも鹿角市の遺跡の例です。9 世紀前半のものです。それから 5 番。これは六ヶ所村の例です。9 世紀後葉から 10 世紀後半くらい。それから 7 番。これは長野県松本市内。松本にはたくさん石組の炉があります。長野県は松本市内だけじゃなく、その周辺にもたくさんあります。この遺跡は長い期間にわたって生活が続いた遺跡です。このグラフで白い線が石組カマド、灰色が粘土で作ったカマドです。これを見ると 7 世紀後葉にも石組カマドがありますね。特に多くなるのは 9 世紀中葉くらいからです。そして、10 世紀前葉になると石組カマドだらけになります。その後、少し粘土カマドも出ますが、松本市あたりは石組カマドが多いですね。

#### (2) 掘立柱建物付竪穴住居

次に参ります。全部を網羅(もうら)することはできませんので、東海大にある資料をぱっと見て、作ってみたのがこの地図です。四角い黒が「掘立柱建物付竪穴住居」がある遺跡です。ちょっと見づらいですが、秋田県や青森県の津軽地方にも少しあります。それから六ヶ所村にも、「発茶沢遺跡」にあります。

「石組カマド」については、三角の黒で示しました。秋田県から津軽地方にもありますね。六ヶ所村にもたくさんあります。みんな 10 世紀中葉以降です。秋田県鹿角市「高市向館遺跡」は少し古くて、9 世紀前半のものです。同じく鹿角市の「中の崎遺跡」にも石組カマドがありますが、こちらは 9 世紀後半。「掘立柱建物付竪穴住居」もあります。次に「腹鞆(はらがいの)沢遺跡」。これも秋田県能代市、9 世紀後半です。「大面(おおづら)遺跡」。これは、青森県のものです。「掘立柱建物付竪穴住居」はありませんが石組カマドはあります。10 世紀後半のものです。

このような分布から、石組カマドは、何となく秋田県あたりから来ているかなという感じもする

のですが、まず、米代川流域が古く、それから津軽の山間地ぐらに行き、その後、六ヶ所村あたりに来たかな？という気がしています。ただし、石組カマドは、古くは5世紀後葉に、長野県や群馬県北部あたりに出現していました。

それから、「掘立柱建物付竪穴住居」。何度も言ってきましたが、推定復元図はこんなふうです。これは、少し前にお亡くなりになられた八戸工業大学の高島(成侑)先生が最初に復元されたものです。「発茶沢遺跡」の報告書の中に載っています。その図を使わせて頂いています。

図の向かって右側が掘立柱建物跡、左側が竪穴住居です。何に使われたかについては諸説あるのですが、共通して皆さん仰られることは「豪雪地帯にある」ということです。ですから、使用法もそれと関係があるのではないかと言われてきました。ただ、限られた集落にしかありません。六ヶ所ならば、発茶沢からしか見つかっていません。六ヶ所村内からはかなりの数の平安時代の遺跡が発掘されたのに、発茶沢からしか見つかっていない…。津軽側でもそうです。たくさん掘ってますけど、いくつしか出土していません。それに一つの集落に、たった数棟しかないのです。

出羽地方を考えてみます。ここは陸奥に次ぐ馬の産地です。どうやら、馬の産地では、冬に馬を外で飼う場合、冬にエサをどうやって確保するかが問題になります。ですから、冬に雪があまり降らない方がよいのです。そして雪深いところの場合、掘立柱建物と竪穴住居が組み合わさったタイプの建物の中で飼っていたのではないかと…というふうに、私などは考えているわけです。しかし、すべての集落にあるわけじゃないし、集落の中でもいくつしかありませんから、特別な馬でも飼ってたのかなあ～？ どうでしょうか…。

さて、六ヶ所村は馬の産地。それからもう一つは砂鉄の産地です。これらと関わる産業が適しているのでしょうか。そして、どうやら、「尾駁の駒」の歌のころにですね、開拓があったようです。誰が行けと言ったのでしょうか？そこに住んで馬を飼ってくれと…。あるいは馬を飼う人々の自主的な移住があったのかも知れません。いずれにしても、誰か、馬を利用する人々に支えられて、六ヶ所村の開拓があったのではないかと…と思っています。「尾駁の駒」とすぐに直結することはできません…。それでも、非常に性質の良い特別の馬を飼いたいと思いながら、馬飼の人々は馬を育てる地域を広げてきたのではないのでしょうか。

#### 4. 古代の上北地方の自然と文化

次に少し自然を見ておきます。ちょっと話が前後してしまいましたが、7世紀、8世紀に東北地方の東側で遺跡が増えます。それは、どうやらその地域が馬を飼うのに適していたからなんですね。冬に雪が少ないのです。ただしその時期、六ヶ所村にはまだ誰も住んでいませんでした。私は六ヶ所に来て見るまでは、六ヶ所の気候を調べたことがなく、雪が深いなんて、実は知りませんでした。

『青森県史自然編』の「県内の合計積雪量」、これを見て、びっくりしたんです。やはり積雪量が「掘立柱建物付竪穴住居」の分布と関係があると思いました。この図を見ると、三沢市あたりは雪があまり無い方に入ります。それに対し、小川原湖の北半分、こちら側は雪がある地域に入ります。六ヶ所村はその中に入ります。

この図は高橋恵子さんという方が筑波大学に提出した卒業論文のものです。それが『秋田考古学』という秋田県考古学協会の雑誌に掲載されていて、それを使わせてもらってます。大体、豪雪地帯は、図上、この赤線よりも西側、あるいは北側になります。点々点と小さい黒点が、竪穴住居+掘

立柱建物ですから、それらは豪雪地帯にあるというわけです。「降水による地域区分」の図の真ん中の地域です。そこに同じ線が引かれています。豪雪地帯とそうでない地域とが、気象学的に分けられています。青森県おいらせ町の「阿光坊古墳群」は雪の無い方に入り、六ヶ所村の「発茶沢遺跡」は雪が多い方に入ります。こんな感じです。

次に「気候による地域区分」の図について。これも、赤い線で分けることができますのですが、同じですね。先ほどの『青森県史』に載っている「青森県の年合計積雪量の分布」表で、1961年から1970年の頃。今よりもまだ雪が深かった時のものです。紫で囲ったのは、積雪量3メートル以上です。合計の積雪量ですから、見た目でも3メートル積もっているということではなく、降った量を合計すれば3メートル以上降ったということです。八甲田あたりは、11メートルであると書いてありますが、トータルでの積雪量です。それでも、「阿光坊古墳群」が1.5メートルから2メートル、「丹後平古墳群」のあるところは1.5メートル以下です。実際に積もっている量は、おそらく30センチということになると思います。これらの積雪量から考えますと、冬に馬を戸外で飼うならば「阿光坊古墳群」がある方が適している。それに対し、それよりも北や西の地域は適していないわけです。7世紀、8世紀に集落が増えた方は、実は、冬に雪があまり降らない地域です。そういうことだったんですね。「掘立柱建物付竪穴住居」の分布は多雪地帯にあたるのですが、単に雪だけでなく、馬との関係も考えるとその用途がわかるのではないかと、ということです。

次の図は1940年段階の稗の作付面積を基礎にして地理学者・山口弥一郎さんがお作りになられた「東北地方における稗の分布」という地図を下敷きにしたものです。そこに7～11世紀の集落遺跡の内容を考慮して地域区分を試みたものです。西側は多雪地帯です。このオレンジ色で分けているところですね。ここは水稻に適しています。そして9世紀から10世紀の移住がありました。須恵器や鉄も生産されました。夏に温暖な地域です。それに対して、東北北部の東側は、夏にヤマセが吹き、冬は積雪量が少ない、それから、土は黒ボク土地域ということになります。そういうところは、雑穀と馬飼が適しています。そこには7世紀、8世紀に多くの移住がありました。

だんだん時間が無くなってきていますから、少し飛ばします。私は欲張りなので、たくさん図を付けすぎてしまいました。少し、急ぎます。

次に青森県上方地方の地理的な条件を見ておきます。図のこの地域が六ヶ所台地です。それより南に小川原低地と七戸台地と呼ばれているところがあり、さらに南に、三本木・三沢台地があります。六ヶ所のあるのは上北北部、そして小川原湖があるのが上北中部。それより南を上北南部とします。飛鳥から奈良時代、7世紀、8世紀、“第二の移住”の頃、上北中部くらいまでは集落が造られるのですが、北部までは来ていないことが分かります。それが、“第三の移住”の頃には、北部にまで到達しています。時間がありません、さらに急ぎます。

## 5. 上北地方の自然にあった産物 -馬と鉄-

### (1) 馬

次に「上北地方の自然にあった産物」を考えてみます。もうすでに、何度も言ってきましたが、この地域の自然を考慮しますと、適した産業は「馬」や「鉄」に関係するものという事になります。

最初に「馬」を見ておきます。ここに示したのは黒ボク土の分布図です。「日本の土壌図」という地図を使っています。九州の阿蘇山や静岡県の富士山ですとか、中部高地の八ヶ岳、浅間山、そ

して東北の火山列が南から北に続いて、北海道に至ると洞爺湖に面した有珠、道東の十勝岳というふうには、日本列島の各地の火山の東側に黒ボク土があることが、よく分かる図です。黒ボク土というのはその火山灰土にイネ科の植物が生えて、その有機物が混じって土壌化したものです。できた土が黒くて「ボクボク」しているので黒ボク土と言われているそうです。

土壌学の方が書いたものを読みますと、黒ボク土中にはアルミニウムイオンが多いのですが、これは一般の植物の生育には有害なのですが、イネ科の植物はそれを好むのだそうです。いわゆる雑穀はイネ科ですから、そこには十分生えるわけでありまして、そして、馬が大好きなのがササ、ススキなどのイネ科植物だというわけです。

そしてどうやら、この黒ボク土地帯が、古代の馬飼いの地だったわけです。それを示すのがこの図です。これは平安時代、10世紀の『延喜式』に載っている、古代の官営の牧場の分布図です。カラーで示されているところが牧場です。「近都牧(きんとまき)」「諸国から貢がれた馬牛を、京に運ぶ前に一時的に放牧しておく都近辺の牧場」、「御牧(みまき)」「朝廷の直轄牧場」、「諸国牧(しょこくまき)」「軍政一般を司る兵部省(ひょうぶしょう)が管轄する牧場」とかあります。この分布状態を目に焼き付けてください。黒ボク土の分布域と似ていませんか？

黒ボク土地帯は、樹木の林などよりも笹原とかススキの原になっていたところですよ。そこで馬が飼われていたというわけです。

ただし東北地方の牧はですね、平安時代の『延喜式』には載ってませんから、図に示したのは近世・近代の牧場の情報を使って、東北大学にいらっしゃった入間田先生がお作りなれた図を転用させていただきました。黒い上向き三角で示しているのが中世東北の牧、黒い下向き三角が近世南部藩の牧です。これもおおかた、黒ボク土地帯にあることがよく分かると思います。7世紀、8世紀に東北で集落が開かれたのも、そこなんです。そして末期古墳が作られた範囲も、だいたいそこに入るというわけです。

東北地方にも古代に官営の牧があっても良かったんじゃないかと思いますが、そういうことはありませんでした。わざとしなかったのでしょうかね。私は“蝦夷征討は無かった”と言っていますが、古代の文献によれば、蝦夷征討があった。しかし10世紀にはそれは終わっていましたから、そこを領域内にして牧場をつくっていてもよいはずですが、そんなことはしなかった。それはなぜか？多分、そこには多くの私牧があって、それを自分達で都合よく利用していた、ということかと考えています。官営の牧にしてしまえば、馬を定期的に召し上げられてしまうのに対して、私牧ならば、それはありません。

さてもう一つ、六ヶ所に人々が突然住むようになった理由は、馬以外考えられないということをするために、水稻の例をちょっと見ておきます。古代の各地の産物で一般的に重要なのは稲、馬、鉄です。しかし稲に関して言えば、東北地方の東側、黒ボク土地帯はその生産に向いていません。この図は冷害時の各地の稲収穫量に関する地図です。左側が1934年、右側が1935年です。より黒っぽい地域ほど、収穫量が減った率が高いというふうに見えます。六ヶ所のあたりは、どちらの年も非常に黒っぽく見えます。ですから、六ヶ所は水稻適地ではないというわけです。

## (2) 砂鉄

次に砂鉄の分布をちょっと見てみます。黄緑色の点が打たれたところが砂鉄の埋蔵地、青い四角

が9世紀後半～11世紀の鉄生産地。砂鉄を始発原料として鉄生産をおこなった遺跡です。鉄生産遺跡が津軽側や秋田県側に偏っているのが見てとれると思います。このように鉄生産は津軽側で行われますが、砂鉄の大産地は東側です。図では小川原湖の東側を塗りつぶしてありますが、「淋代(さびしろ)」という地域があります。このあたりは砂鉄の大産地です。淋代は、現在では三沢市に入ります。無着陸で太平洋横断をしたミス・ビードル号が離陸した砂浜としても有名ですね。

淋代あたりで砂鉄を採って、それを小川原湖を舟で、次に馬で陸奥湾沿いに出て、再び陸奥湾を舟で、というふう津軽まで持っていったのではないかと、私は思っています。津軽地方には、現在、砂鉄の大産地はありません。地質から考えて、過去においてもなかったでしょう。10世紀後半の津軽地方の大製鉄地域を支えたのが、もしかすると、六ヶ所側の砂鉄だったのではないかと思うわけです。しかし、淋代で砂鉄を採って津軽に運んだことを証明するのはなかなか難しいですね。これについては、私なんかよりも、地元の方々にどんどん研究していただきたいと思うんですけども…。一応、馬と砂鉄ってのが、六ヶ所村の有効な産物ではないか！と考えているわけです。

## 6. 結論：平安時代の六ヶ所村域に馬はいたか？

それでは結論に参ります。さて、平安時代の六ヶ所村に馬はいたか？という問いでしたが、馬の歯や馬の骨といった、直接馬を示すものが六ヶ所から出土しました！というお話は一切できませんでした。そのかわり、“六ヶ所にやって来た人々は馬を飼っていた”のではありませんか？というお話に終始したわけですが、自然環境から考えますと、確かに六ヶ所村は馬の飼育に適しています。そして、それ以外の産業にはあまり向いていないということになります。相当な努力をすれば別です。現在では、土地改良などをおこなって、様々な農産物が作られていますね。ただ、平安時代当時のことを言えば、手付かずのその条件の環境に入ってくるわけですから、馬と砂鉄以外は、ちょっと考えられないわけです。ですから、それだけを目的として入ってきたのではないのでしょうか。

9世紀後葉に突然集落が出現し増加するのも、何か、特殊な意図があつてのことであり、既にそのような自然環境であることがわかっていてやって来ているのかなと思っています。それから、稀有(けう)な出土品が見つかっています。石帯や灰釉陶器片の硯などです。石帯は、それなりに位の高い、四位、五位の貴族から、そういう人からもらったものかな？…というふうに思っています。何かつながらがあつたのではないかと…というわけです。どんな関連かといえば、やはり馬産以外には考えられないんじゃないのでしょうか。それから結論ですが、平安時代の六ヶ所村では、馬産が盛んでした！…と、言い切っておきます。ただし、一応、これは、消去法的にそう考えられる…ということではあります。

## 7. 今後の課題と簡単な見通し

今後の展望を少し述べておきます。地名の話にも少し触れましょう。本題では全然、地名のことは言っていないのですが、展望として、ちょっとだけ見通しをお話します。

まず、第1番目です。「尾駮」という地名がいつからあつたかを考えてみなければいけない！と、強く思っています。10世紀の歌には「尾駮の駒」と歌われていました。「尾駮の牧」ではありません。その「尾駮」は地名ではありません。ですから、「陸奥の尾駮の駒」のことを、すぐに、陸奥に「尾駮」というの地名があつたとか、「尾駮」という牧があつたとかいうふうには言てはいけな

い…と思います。ただし、気にしておくべきなのは、なぜ「尾駮」という地名が現在の六ヶ所村あたりに付いたんだらう？ということ。もちろん、「尾駮の牧」があったから「尾駮」になった…と直結するわけでは、全然ありません…。いろんなお話があると思うんです。古代にそういう歌があったから、ある時期に、地域起こしみたいな感じで地名を付けた…とかですね。そういうことがあったかもしれません。ですから、それは「尾駮の牧」と直結してはいけませんが、いずれにしても、「尾駮」について考える責任があるんじゃないかな…と思ったわけなんです。六ヶ所村に関わる者としては…ですね。

地名について、東海大の図書館で調べてきたことについて、少しだけお話しておきます。この写真は、国土地理院の2万5千分の1の地形図に載っている「字名」が全部載っている本です。それで「尾駮」という地名を探しますと、六ヶ所村にしかありません。ほかに、宮城県に2箇所、小さいふちって書く、「小淵」があります。また、似たものに山梨県北部の「小淵沢(こぶちざわ)」という地名があります。したがって、「小さいふち」と書く「小淵」はほかにもありますが、「尾駮の駒」と同じ「尾駮」は六ヶ所村にしかない…ということですね。

それから、1647年に描かれた「南部領内総絵図」が、盛岡市の中央公民館にあるのですが、それを撮影したものが『青森県史資料編近世1』に収録されています。そのコピーを今、写しています。現在の尾駮沼とほぼ同じところに、「尾駮」と墨で書かれていますね。旧尾駮村の辺りですね。1647年の地図です。この「尾駮」という地名が、いつ、なぜ付けられたか？もっと考えなければいけません。

その後、1647年から150年くらい経った1793年に、菅江真澄さんが六ヶ所村にも歩いて来ています。この方は三河の生まれですが、薬学などを学んで、30代以降、東北北部に住んで旅をしています。民俗学者ですね。それから、地誌を書いて歩きました。その方の日記に、今の六ヶ所村あたりの人と語ったことが書かれています。何を語ったかと言っていると、「昔、そこに牧があった」「出戸の浜から、云々」と書いてます。現在の高牧あたりの話です。昔、「たがまぎ」と言ったんですか？「むかし、そこに牧があった。ここから尻尾の毛がまだら色にはえみだれた馬がうまれたので、それをときの帝に奉ったところ、もっぱら尾駮の駒とよび、この牧を尾ぶちのみまきと称した。云々」とあります。そんな話が、1793年ころには出来たということですね。それから、これもまた高牧のあたりの話ですが、「その高牧の下方に、雪も深くない岡のようなところに、枯草の色がわずかにあらわれていた。それが尾駮の牧の古跡であると、人が指して教えてくれた」とあります。そして「尾駮の村近くを牛を追って進んだ。まことに古歌によまれた尾駮の牧は、陸奥はないといわれたり、またその名があるのだから、うたがうまでもあるまいなどと、むかしから、さまざまに誤伝されていた。しかし、来てみるとたしかにここにあった」こんなふうに書かれています。要するに、1793年段階、今から200年前に、すでにそのように話されていたのです。それは、なぜできたのでしょうか？そして、いつできたのでしょうか？これらのことを、もう少し考えてみる必要がありますね。これは、地元の研究会の方々の方が、私なんかよりも適任だとは存じます。

そして第2番目は、考古学的な調査の充実です。私自身、正確にできるのは考古学ですから、考古学的な調査は、我々が続けなければいけないというふうにも思っています。そこで次に考古学関連のお知らせをして終わりにしたいと思います。

## 8. 最後にお知らせです

今日のお話の本題は、これで終わりなのですが、最後にお知らせをさせていただきます。この会場に、東海大学の学生たちが 10 数名来ておりますが、現在、東海大学の考古学専攻では、9月の8日までの日程で、倉内の「金堀沢遺跡」で発掘調査をしています。地籍は「唐貝地」になります。

これがその写真です。窪地(くぼち)になっていることがわかると思いますが、そこを掘って、今、ここまで掘り進められています。これは昨日の写真ですけれども、学生たちが地面上部から順番に少しずつ、掘り下げている最中です。まだ、床面には到達していませんが、この窪地は住居跡だと思っています。ただ、本当に平安時代の住居跡かはまだ確定していません。昔の人が穴を掘って、そこに屋根をかけて住んでいたのですが、そこが廃棄されて、そのまま放置されて、自然にただ埋まっていっただけのところです。それを、時計を逆に回すように、時代を1枚1枚はいでいっている最中です。〔その後の調査で、この「窪地」は平安時代の住居跡であったことが確実にわかりました〕

そして、9月の6日の日曜日にですね、「現地公開」をいたします。立派な説明会は、残念ながら、我々にはできないものですから、ただ、遺跡を調査しているところをご覧いただくというだけです…。「現地公開」が日曜日の午後ございますので、どうぞご自由に、いらしてください。何の連絡も必要ありません。ただ、駐車場はありません。教育委員会の方や、相内さんに聞いていただいたりしてですね、来ていただきたいと、そう思います。

中途半端な地図しかありませんが、こんなところです。右側に倉内集会所がありますね、私たちは今、そこを使わせていただいて自炊しているのですが、そこが倉内の中心地になります。そこから西側に約3キロ行きます。そして内沼の集落に入る手前の林が遺跡です。そんなところなので、駐車場はありませんが、是非ご覧になっていただきたいと思います。

ちょっと時間を超過してしまいましたけれども、本日は、これで、終わらせていただきます。どうも、ありがとうございました。

(会場、大拍手)